ソッフイ『どうして、あの猫は飢いのを耐えて、叢の中に居たのでせう？』

母『悪戯な子が、さんざん打つて捨てたんだらうよ、又殺されるまで、そこに默つて居るやうな、馬鹿な猫でも無かつたのね、お前達に見出されて、救はれたのだから……』

ポール『でも、この猫は、私達が垣根の所を通る事は、前から知つて居たんぢやありませんよ』

母『え、猫は、知らなかつたけれ共、神様が彼を救つて、其上にお前達にまで、慈善をおさせて下さつたのですよ』

と御母様がお仰いました。

ソッフイとポールは、早く猫が見度いので、お話もろくくきかずに、急いで臺所へ參りました。

猫は、暖い灰の上に、よく眠つて居りました。

そして、コックが置いた、お乳の皿も其側にありました。子供達はそれを見て、折角睡てゐるのを起すでも無いと思つて、其儘お庭の方へ行きました。ボーミノンは、だんくに御馳走を食べで、肥つて元氣が出て來ました。そして、大きくなる程立派になつて參りました。長い和かな、白い絹糸の樣な、毛が、澤山生えて、黑い目が、太陽の樣に光つて、小さな桃色をした鼻が、可愛らしう御座いました。

ソッフイは、此猫を非常に可愛がつて居りましたが、時々遊びに來る、ポールも此猫が大好きで御座いました。此猫は皆からも可愛がられて、大變幸福でありました。しかし、此猫には、一つの惡い癖がありました、其癖については、ソッフイも大そう心配して居りました。それは、鳥をひどい目に遭はす事でした。庭に出ると木に登つて、鳥の巣をめつけては、その中に入つて居る、雛を食べてしまひ、時には、其親迄もたべてしまふ事がありました。そういふ事を見出した時は、ソッフイとポールは、一生懸命に、木から下さうと思つて、呼びますけれ共、一寸も云ふ

事を聞きませんでした。そして、鳥が摑まれて、鳥の啼き聲が、悲し相に聞える事が、度々御座いました。こんな惡戯をしました時は、木から下りて來た時に、ソッフイが大變叱つて、打いて懲しましたけれ共、一向きゝめが御座いませんでした。終には、ソッフイの姿を見ると、木の枝の上に小さくなつて、隱れてしまひ、下りて參りませんで、ソッフイの手の屆かない所の枝から飛び下りて、大急ぎで逃げてしまふ樣な、惡戯猫になつてしまひました。

子供達は「今に御覽、そんな惡戯をしてゐると、神樣から罪を責められるから」と云つて其都度叱言を申しました。

或日、御母樣が、奇麗な籠の中に、美しい鳥を入れて、持つてお出でになりまして、

『まあちょいと御覽よ、こんな綺麗なカナリアを、御母樣のお友達が、贈つて下さつたのだよ、此鳥はよく囀るのよ』

とソッフイとポールにお見せになりました、すると二人は喜んで、

『早くその啼聲を、聞き度いものね』

と云ひますと御母樣は、

『あゝ今、聞かしてあげるよ、けれ共あんまり側に寄ると、鳴か無いから、離れておいでなさい』

とおつしやつて、その鳥に向つて、

『あゝこれ〳〵鳴いて御覽ん』

とおつしやいますと、カナリアは、あちらこちら、飛びはじめて、首を右へ曲げたり、左へ曲げたりして、鳴き初めました。子供達は鳥を驚かさない樣に、息もつかずに、じつとして聞いて居りましたが、暫くして、歌が濟んでから、

『まあ何といふ、いゝ聲でせう！ 始終こんな鳥の聲を、聞いて居度いものですね』

と申しますと、御母樣が、

『それでは御飯後に、又鳴かせて見ませう、此鳥は遠くから來たのだから、今は

勞れて居るでせう、餌を持つて來て、少しおやりなさい、庭へ行つてハコベか、何かの草をとつておいでなさい、植木屋が、その草の生へてゐる所は、知つてゐますから……』

子供達は、直に庭の方へ走つて行きましたが、やがて、鳥の籠に一杯になり相な程、澤山ハコベを摘んで參りました。御母様は吃驚なさつて、

母『そんなに、澤山一度に摘まないでも、此度からは、一つかみ位摘んで來ればよいのよ』

とおつしやつて、少しづゝ鳥籠の中へ、入れておやりになりましたら、鳥は喜んで直に食べ初めました。

『さあ御飯を食べに行きませうよ、御父様が待つて入らつしやるから』

と云つて、御母様は二人の子供を連れて、食堂へお出になりました。そして食事の間は、此鳥のお話で持切りました。

母『何といふ、綺麗な黑い頭でしようね』

ポール『お腹も眞赤で、綺麗ですね』

母『綺麗ばかりでなく、よく囀りますよ』

父『それでは、いろんなものを、歌はして見樣ぢや無いか』

斯う云ふ話をして、御飯がすんで、直ぐ御座敷の方へ皆で參りました。御母様が、御座敷の入口へ、御入りにならうとして、吃驚した聲をお出しになりました。そして子供達二人は、口もきけ無いで、指さしをして立て居りました。

見れば、鳥籠は毀れて、ボーミノンが、中の鳥を啣えて、飛び出したので御座いました。それで、御母様も、吃驚遊ばして、鳥を離させやうとして、直猫をつかまへやうと遊ばしました、猫は、椅子の下へ隱れてしまひました。丁度そこへ御父様が、入つていらつしやつて、火箸を持つて、たゝかうとなさいました。けれ共、猫は開きかゝつた戸口から、逃げてしまひました。すると御父様は、室から室、廊下か

ら廊下へ追駈けて、お出になりました。けれども可哀相に、この鳥は遂〳〵鳴くこ
とも出來ず、ばた〳〵もしなくなつてしまひました。
やつと御父様が、火箸でボーミノンの頭を、御打ちになりました。所があまり強
く打たれたと見えて、鳥を口から離しましたが、ボーミノンも同時に倒れてしまひ
ました。そして、二三度びく〳〵して、死んでしまつたので御座います。
御母様も、子供達も、御父様の後からついて、猫の後を追駈けて參りましたが、
丁度ボーミノンが倒れて、びく〳〵してゐる所へ入つて來ました。
『まあ可哀相に、私のボーミノンが』
とソツフイが申しました、するとポールが、
『可哀相にカナリアが死にましたよ』
と申しましたので、御母様も驚いて、
『まあ！あなたは何をなすつたのです？』

と御父様にお問ひになりました。
『私は、惡いことをした者を、罰する事は、成しとげたけれ共、罪の無い者を、助
ける事が、出來なかつた』
と御父様は殘念相に申されました。ソツフイも、何とも申しませんでしたけれ共、
自分の可愛がつてゐた、猫が死んだものですから、涙をこぼして居りました、そし
てから申しました。
『ねーポールさん、私は度々この惡いたずらをするボーミノンは、きつと終には、
神様から罰しられると云ひましたが、とう〳〵自分の過失から、殺されてしまつ
たのですわね』
と悲しそうに歎息して申しました。

十八　仕事箱

ソッフィは、悪い癖が御座いました。自分が欲しいと思つたものは、御母様に何度も〳〵ねだつて、たうとう終に、御母様が怒つて、室へお閉じ込めになるまでねだりました。そして室に一人閉ぢ込められても、やつぱり、その事ばかり考へて居りました。

『どうしたら私の欲しいものが、得られるかしらん、どうしても、貰らはなけりやならない』

と云つては、度々叱られました。けれ共如何しても、その癖が直りませんでした。

或日、御母様がソッフィをお呼びになつて、御父様が、パリーから送つて下さつたといふ、綺麗な御仕事の箱をお見せになりました。その箱は、外は鼈甲で出來て居て、金の金具がついて居て、内側は水淺黄のビロードで張つてありました。それから、其中には、金色をした仕事の道具が、鋏だの、指抜だの、針入だの、錐だの、糸巻だの、小刀だの、其他いろ〳〵の道具が入つて居りました。

それから、其下の片方には、いろ〳〵の針とピンが、澤山入つて居りまして、それから、いろんな色の絹糸だの、違つた太さの木綿糸だの、リボンだのも、入つて居りました。

『まあ奇麗だ事、何でもお仕事するものが揃つてゐますね、是は誰に贈つて下さつたんです？』

とニコ〳〵し乍ら、必と御母様が、是はお前のだよと、おつしやるだらうと思つて、尋ねました。すると御母様は、

母『是は、私にお父様が、贈つて下さつたのです』

ソッフィ『まあ惜しい事、私が欲しいのに！』

母『そりやお氣の毒だね、是がお前のので無いので……お前は氣持を悪くするだらうけれ共、それは慾張だよ』

ソッフィ『御母様、私に頂戴な、ねー御母様！』

母『お前は、未だ御仕事が、出來ないから、此箱をもらつたつて、何にもならないでせう！そして、お前は何でも打ちやりぱなしにする癖がある、だから此中に入つてゐるものを、皆失してしまふだらう！』

ソツフイ『いゝえ御母様大丈夫ですよ、私は大事にしますから、』

母『だけどね、是は未だお前には善過ぎますよお前は未だ幼いから』

ソツフイ『私はまう御仕事をよくするんですよ、私は御仕事が大好きなの』

母『あゝそうかへ、そんなに好きなのに、私が仕事おしと云ふと、いつでも、不機嫌な顔をするでは無いか』

ソツフイ『それは私がお仕事しなければならないといふ事が、嫌なんですよ、でも此箱を、下されば、喜んで、御仕事を致しますよ、えゝ〜〜喜んでしますとも』

母『それでは、此箱が無くても、喜んで御仕事をなさい、それがお前の好きなものを得られる早道だから』

ソツフイ『御母様！どうか下さいな』

『まあ本當にうるさい子だね、もう此箱の事は考へ無いでおくれよ』

と叱られましたから、ソツフイは默りました。けれ共、始終箱ばかり見て居りまして、十度も二十度もねだりました。それで御母様も、癇癪を起して「お庭へ出ておあそび」と云つて、追出しておやりになりました。けれ共遊びもせず、歩きもせず、腰掛に腰をかけて、どうしたら、あの箱がもらへるだらうと、云ふ事許り考へて居りました。

『もし私が手紙がかけたら、御父様にあれと同じ箱を、送つて下さいつて、手紙をあげるけれ共、まだ私は字がかけないからね、若し御母様に、さう云つてかいて戴いたら、御母様はお怒り遊ばすだらう、第一とても書いては下さるまい、御父様がお歸りになる迄、待つてなけりやならない、それはあんまり待遠しいし、箱は直欲しいのだから』

とさんざ考へてゐましたが、何かいゝ考へが出たと見えて、急に嬉し相な顔をして、

『あゝ出來た〳〵、あの箱はもう私がもらへる』

と云つて御座敷へかけて入りましたが、すると御母様は、そこに入らつしやいませんでした。ソッフイが、そうつと、その箱を開けて、中に入つてゐる、小さな道具を、一つゞゝ取り出しました。けれども、自分は牢屋に入れられる泥棒の様に、そうつと、盗むのですから、胸がどき〳〵いたしました。でも、とう〳〵人の來無い内に中に入つてゐる道具は、皆盗つてしまひました。

それからそうつと、蓋を閉めて、自分の玩具の置いてある、隣の室へ行きまして、小さな玩具の机の引出に、皆盗つて來たものを入れました。

そしてかう考へました。

御母様が、あの箱の中に、何にも入つて居無いといふ事を、御覽になつたら、もう箱丈は入用ないと云つて、私に下さるだらう、そうしたら盗つて來たものを、皆

此箱の中へ入れませうと、斯う云ふ望を持つて、喜んで居りました。

『御母様は何と御思ひになるだらう、誰が盗んだと御思ひになるだらう、もし私が取つたんじゃ無いかとおつしやつたら、何とお答えしよう』

等と云ふ考へは、一寸もおこしませんでした。

御晝迄はソッフイの盗んだ事は、誰にも氣がつか無いで濟みましたけれ共、晩の御飯の時、御母様が御客様に向つて、バツリーから、御父様か贈つて下さつた綺麗な箱を見せやうとなさいました。

母『御覽なさい、私の此箱は、何でも仕事に必要のものが、一つ殘らず入つて居りますよ、まあ此の外側でも御覽なさい、綺麗ぢやありませんか？』

と云つて、自慢なさいました。するとお友達は、

『本當に美しう御座いますね！綺麗ですね』

と賞めました、御母様は、其箱を御開きになりました所が、中には何にも入つて居

りませんでした。

『オヤ！如何したんでせう、今朝迄はちやんとして居て、障りもしないのに！』

と驚いておつしいますと、お友達は、

友達『あなた、是を御座敷へお置きになつたんですか？』

母『えゝ家では、私の物を盗む様な者は御座いませんし、召使の者も皆正直ですからね』

友達『でも、誰かゞ持つて行かなけりや、箱が一人でに空になりやしませんわ』

と云はれたもんですから、ソッフィの胸が急にどき〳〵して來ました。そして、手足がぶる〳〵顫るえ乍ら、顔が赤大根の様に、眞赤になつて人の後に隠れて居りました。御母様は、ソッフィが見えないので、

『ソッフィ〳〵何處に居るのだえ？』

とお呼びになりました。けれ共、ソッフィはなんとも答へませんでした。然し御客

様方が隠れて居る事を知つて、てんでに呼んだものですから、仕方なしに出て來ました。そして彼はぶる〳〵顫るへて居りましたので、誰でも此泥棒は、ソッフィだといふことが分りました。

『ソッフィ此處へお出で！』

と御母様が、御呼びになりました。ソッフィはふるえ乍ら前へ出て來ました。

母『此箱の中へ入つてゐるものを、お前どこへ持つて行つたんだえ？』

ソッフィ『私何にもとりませんよ、私一寸もさはりませんよ』

母『そんな嘘をついてもだめですよ、直皆持つておいでなさい！』

ソッフィは泣き乍ら、

ソッフィ『私は本當に知りませんよ』

と云つて強情張つて居りましたが、御母様は、

『それでは、從いておいでなさい』

とおつしやいました。けれ共、ソッフイが動きませんので、御母様は、ソッフイの手を取つて、玩具のある室へ、連れてお行きになりました。そして玩具の戸棚や、簞笥等を、皆明けて御覧になりましたが、しかしそこには、何にもありませんでした。御母様は間違つたかしらんと思つて、少し當惑なさいました。暫くお考へになつて、小さな机の引出しを、明け様となさいました時、ソッフイは、今迄より一倍顫えましたから、御母様はそれと御悟りになつて、引出しを明けて御覧になりました。盗んだいろ〳〵のものが、入つて居りました。そこで御母様はソッフイを今迄にない程ひどく御打ちになりました。

ソッフイが、いくら泣いても、叫んでも、御許しになりませんでした。御母様は引出しにある物を、皆出して御持ちになつて、元の箱へ入れてお仕舞ひになりました。

ソッフイは、一人そこで泣き乍ら殘つて居りました。ソッフイは食事の時間が來ても、恥しくつて、何うしても、食堂に入れませんでした。御母様はソッフイの

御飯を持たせて、お寄しになりました。平常は可愛がつて、甘やかしてゐた、ばあやも、ソッフイの行ひが、あまり賤しいので、ひどく落膽いたしました。

『此からは、あなたが、こんな泥棒をなさる様ならば、戸棚でも、引出しでも、皆鍵を掛けなけりやなりませんね、家の中で、何でも失なると、直あなたの引出を探しに來るでせう』

と云つて恥しめました。

翌日、御母様はソッフイをお呼びになりまして、斯うおつしやいました。

『お父様が、私に下さつたと云ふ、お仕事の箱は、かう御手紙にかいてあつたんでよ、私がお前に、綺麗なお仕事の箱を贈りますが、それは、ソッフイにやりたいす爲です、けれ共、今それを、彼にやつて下さるな、もし一週間、何にも惡戯をせずに柔順しくして居たならば、此箱を、見せてやつて下さい、しかしこれは彼の物だと云つてはいけません、彼が御賞美を、もらいたいために柔順しくするん

では、何にもならないから、本當に柔順しい子になりたいと思つて、柔順しくなつたので無ければ、御褒美はやられませんよ、ソッフイね！御覽、御父樣からのお手紙はこの通りですよ、是はお前の物だのに、自分の物を自分で盜んだのだよ、あゝいふ惡い事をしたから、これは、當低お前に上げる譯に參りません、是がよい戒めだから、是に懲りて、もう二度と再び、あゝいふ惡い恥しい事を決して爲てはなりませよ』

と云つて、嚴しく戒められましたから、ソッフイは泣き乍ら、

『御母樣！何卒お許し下さい』

と云つて御詫を申しました。そこで御母樣も、その罪は、御許しになりましたけれ共、お仕事の箱は、ソッフイには御遣りにならないで、ソッフイの從姉で、よくお仕事の出來る、柔順しい娘におやりになりました。

正直者のポールは、ソッフイが賤しい行をした事を聞きまして、非常に嫌がつて、

一週間程は、遊びに行きませんでしたが、其後ソッフイが自分のした事を、後悔して泥棒だと云はれた事を、恥しく思つてゐるといふ事を、聞きましたので、又遊びに行つてやりました。そしてソッフイに叱言をいふ代りに、慰めてやりました。

『ねえソッフイ！物を盜んだといふ事を、忘れられるには、人一倍正直になつて、人から正直者だと、云はれるやうにならなければならないよ』

と忠告しましたから、ソッフイも大變喜んで、きつと、何事も正直にしますと、誓ひまして、それからは大變に正直なよい子供になりました。

十九　驢馬

ソッフイは、二週間許りは、大して失敗もしませんで、柔順しう御座いました。それで、御母樣が、何か御褒美をやらうと御思ひになつて、何がよからうかと、考へておいでになりました。所が、或日御仕事をしておいでになる、お室の窓が開いて

居りますと、お庭でソツフイとポールが、遊んで居て二人でお話してゐるのを、御母様が、聞いておいでになりました。そのお話の工合で、ソツフイが、何を欲しがつてゐると云ふ事が分りました。ポールが顔をふき乍ら、

『あゝ暑い〜〜僕は汗がびつしよりになつた』

と云ひますとソツフイも、半布で首や顔をふき乍ら、

ソツフイ『私もこんなに暑いんだよ、二人でこんなに骨を折ても、大した仕事は、出來無かつたのね』

ポール『車が小さいんだもの！』

ソツフイ『畑にある、大きな車を持つて來ませうか、そしたら仕事が、捗取るでせう』

ポール『然し僕等には、あんな大きな車は、引けやし無いよ、この間、持つて來やうと思つて、引張つ見たけれ共、なか〜〜重くつて、引かうと思ふと反對に車から引張られて、車の中の泥を皆こぼしてしまつたよ』

ソツフィ『それでも、こんな事してゐちやア私達のお庭は、何日出來るか分りませんね、植木を植る迄には、百度も車でこの土を、運ばなければならないね、土のある所迄隨分遠いんだから』

ポール『仕方が無いやね、長くかゝつても、其中には出來るさ』

ソツフィ『あゝ驢馬が一匹あればね、その驢馬に、小さな車をつけて、引かせれば、ぢきに出來ちまうんだがね』

ポール『そうね、けれど、我々は驢馬を持つて無いから、驢馬の仕事を、自分でせにゃ仕方がないさ』

ソツフィ『あゝい、事がある』

ポール『お前また何か考へ出したのかい、きつと又馬鹿げた事を、考へ出したのだらう』

ソツフィ『そんなに馬鹿にしないで、まあ御聞きなさいよ、私の考へは、非常にいゝ

事ですから！おまへの御母様は、お小遣をいくら下さるの？』

ポール『一フラン下さるのよ、けれどそのお金は、玩具を買つたり、貧乏人に、施したりする爲に下さるんですよ』

ソツフイ『そうですか、私も一フランもらふのよ、それでおまへのお小遣を合せると、一週間に二フランになるでせう！それを使はないで、貯めておいて、驢馬と車を買はうぢやありませんか』

ポール『おまへの考へは、私達が、二フランを、二十フラン貯める事が出來たら、そりやいゝでせう、けれ共、たつた二フランでは、貧乏人に施す事も、出來ないじやありませんか、其上、驢馬と車を買ふには、二年もかゝりますよ、』

ソツフイ『一週間に二フランづゝ貯めたら、一月には、幾らになるの？』

ポール『いくらになるか、判然は分らないけれど、兎に角驢馬は買へないやね』

ソツフイは、少し考へてましたが、

ソツフイ『あゝいゝ事がある、お母様と伯母様に、我々に下さるお歳暮のお金を、今かうじやありませんか？』

ポール『そりやだめよ、下さりやしませんよ』

ソツフイ『兎に角御願ひして見ませうよ』

ポール『お前、行つて聞いておいでよ、僕はお母様達が、お許しならぬことを、聞きに行くのは、嫌だよ』

とポールが申しましたが、ソツフイはかまはず、御母様の所へ、馳けて行きました。

ソツフイ『御母様！御歳暮を下さいませんか？』

母『御歳暮ですつて！こゝでは、お歳暮は、買へやしないやね、パリーへ歸つてから、上げやうと思つてゐるのだから……』

ソツフイ『いゝえ御母様、品物は入らないのです、御歳暮をお買ひになるお金を、下

さいませんか、今少しお金が入るんですから』

母『どうしてお前は、そんなに澤山お金が入用なの？若し貧乏人にやるんなら、私がやりませう、施すためのお金なら、何日でも、私は出して上げるよ』

ソッフイは少し困つて、

ソッフイ『いゝえ貧乏人にやるんじや無いんですよ……あの……驢馬が買ひ度いのですよ』

母『驢馬を買つて如何するんだえ？』

ソッフイ『ポールと二人で、驢馬が入るんですよ、御覽遊ばせ、こんなに、私は汗びつしよりになつてゐるでせう！ポールは、私よりもつと暑がつてゐますよ、御庭を作へやうと思つて、二人で今朝から、一生懸命に、土を運んでるんです』

御母様は笑ひ乍ら、

母『まあお前達は、驢馬がお前達の代りに、働くと思つてゐるのかえ？』

ソッフイ『いゝえ、そうじやないのよ、御母様！驢馬が土運びの出來ない事は、私だつて知つてゐますよ、驢馬につける、車も買うんですよ、そして車に驢馬をつけて、土を運ばせるんですよ』

母『お前の考へは、好い考へだね』

とおつしやいましたので、ソッフイは手を叩いて喜んで、

『本當にいゝ考へでせう！』

と云ひ乍ら、窓の所へ、走つて行つて、ポール〳〵と呼びました。

母『まあそんなに、喜ばないで御待ちよ、お前の考へは、大變よろしいけれ共、御歳暮のお金を、今上げる事は、私は好みません』

とおつしやいました。ソッフイは吃驚して、

ソッフイ『それぢや何うしたら好いでせう？』

母『まあ靜かにお聞きよ、お前が、今迄のやうにいつでも、柔順しくして居るなら、

驢馬も車も、早速買つて上げませう』

とおつしやいましたものですから、ソツフイは、大喜びて、御母様に飛びついて、キツスをいたしました。

ソツフイ『あゝ嬉しい事！御母様ありがたう御座います』

と御禮を云つて、又窓際に行つて、

ソツフイ『ポール〳〵早くおいでよ、御母様が驢馬も、車も下さるつてさ』

ポールは馳けて參りました。

ポール『どこにあるの？驢馬と車は？』

ソツフイ『御母様が私達に下さるのよ』

母『えゝ〳〵、お前達二人に上げますよ、ポールは親切で、よく云ふことを聞いて、柔順しいから、又ソツフイは、ポールの親切や、働き振を、見習つて、一週間もおとなしく爲てゐましたから、二人に御褒美として上げるのです。さあ二人共、

入らつしやい、別當のランベールによく云ひつけて、買はせませう』

とおつしやいましたから、二人の子供達は、御母様の前へ、馳けて行きました。そして中庭で、ランベールが、今買つて來た麥を計つて居る所へ、二人子供達が來て、早口で驢馬と車の事を、話込みました。ランベールには、何事か一寸も分りません、吃驚して、子供達の顔と、御母様の顔と、見比べて默つて居りました。すると御母様が、その譯を、ランベールによく云つて、御聞かせになりました。

ソツフイ『直行つておいでよ、ランベール御飯前に、驢馬が入用んるだから』

ランベール『驢馬が、そう直あるもんじやありませんよ、お嬢様何所に、賣物の驢馬があるか、探すには、村中聞いて歩かなきやなりません、そしてその驢馬は、跳ねたり、嚙みついたりする樣ではいけません。あんまり若くつてもいけず、あんまり年とつてゐてもいけず、柔順しい、驢馬で、無くてはいけませんからね』

ソツフイ『たつた一匹の驢馬を、買うのに、そんなに、いろんな手數がいるの、何でも

いゝから見付かつたのを、直買つておいでよ、少しでも早く、欲しいのたから』

ランベール『どうして〳〵お嬢様、そんな事はいけませんよ、よく驢馬の性質を知ら無いと、あなた方に嚙みついたり、振り落したりいたしますからね』

ソツフイ『なあにポールが居るから大丈夫よ』

ポール『いやだよ僕は、驢馬を柔順しくさせたり、馴らせたりする事は、知ら無いんだもの！』

母『まあランベールに任せておゝきよ、あれが善い驢馬を見つけて來るだらうから』

ポール『車はどうします？驢馬につけるやうな、小さな車があるでせうか？』

ランベール『御心配遊ばしますな、私の犬につけて引かせる車を、貸して差上げませう、何日迄でもよろしい時まで、御使ひ下さいまし』

ポール『あゝそうかいありが度う！』

ソツフイ『早く行つておいでよランベール！直においでよ』

母『ランベールは、麥をしまはなけりやならないから、待つておいでなさいよ、中庭の眞中へ麥を擴ろげたまゝだつたから、鷄だの、雀だのが皆食べてしまふだらう』

とお母様がおつしやいました。

ランベールは子供達が、急いで居るのを見て、早速麥の袋を、物置の中へしまつて、驢馬を見つけに近所へ出かけました。

ソツフイとポールは、直にランベールが、驢馬を見付けて、歸つて來るだらうと思つて、家の前で待つたり時々、外の方へ行つたりして、ランベールが歸つて來るのを待つて居りました。所が、一時間許たつても、かへつて參りませんでしたから、只默つて待つて居る事が、退屈になりました。ポールは欠伸をし乍ら、お庭の方へ行つて、遊ばうぢやないかと云ひ出しました。ソツフイは欠伸をしながら負けおしみに、

『こゝに居て面白くないの？』

ポールは又欠伸をし乍ら、

ポール『少しも面白く無いや』

ソツフイ『でも、若しランベールが、驢馬を連れて歸つても、こゝに居ないと、見られ無いぢやないの』

ポール『そんなに早くは歸つて來ないよ』

ソツフイ『私は直歸ると思ふわ』

ポール『それぢや待つてませうよ、けれども……』

とまた欠伸をし乍ら、

ポール『つまらないなあ！』

ソツフイ『そんなに退屈なら、何處へでもおいでなさい、私一人で待つてるから！』

と怒つて云ひますから、ポールは、少し困つた顔をして居ましたが、

ポール『それぢや僕行くよ、本當に馬鹿〳〵しいな、こんなに待つてゝ、何處に居たつて、ランベールが、驢馬を連れて來れば、分るぢやないか、きつと誰かゞ知らせに來るし、又、歸つて來ないなら、いつまで經つたつて、退屈する許りじやないか』

ソツフイ『彼處へ人らつしやいよ、私は何時までゝも待つてゝよ』

ポール『譯も分らないで怒つてばつかり居るよ、それじや、御飯の時、お目に掛りませうね、怒りつぽの御孃樣！』

ソツフイ『左樣なら、譯の分らずやの、ふくれつ面の、氣短の坊らやん！』

ポール『左樣なら、柔順しい、氣の長い、親切なソツフイさん』

と云ひ返しましたから、ソツフイは、ポールを打うと思つて、追かけて行きましたが、ポールは、ソツフイがきつと、打くだらうと思つて、いち早く逃げました。そして振り返つて見ますと、ソツフイは何處でか棒を拾つてそれを振り上げて、追か

けて來ました。ポールは、大急ぎで森の中へ隱れました。ソッフィは、ポールの姿が、見え無いので、仕方無しに、家へ歸つて行きました。

ソッフィ『まあよかつた、ポールが、早く逃げて！さもないと、私はきつと、棒でポールを打つたゞらう、そうすれば、ポールは、痛がるし、御母樣がその事を御知りになつて、驢馬も車も下さらないとおつしやるだらう、ポールが歸つて來たら、私から謝罪もせう、彼の子は、好い子なんだけれ共、時々人を調弄つていけない』

と獨言を云ひ乍ら、御飯の鐘が鳴る迄、ランベールの歸つて來るのを待つて居りました、とう〳〵終ひに、いつ迄待つても、ランベールが歸つて來ないものですから、室へ入つて來ました。

其時、室の中に、ポールが居まして、輕蔑した樣な樣子をして、ソッフィを見ました。そして斯う話しかけました。

ポール『面白かつたですか』

ソッフィ『非常に退屈したのよ、お前は逃げ出してよかつたね、まだランベールは歸つて來ないのよ本當にじれつたいね』

ポール『だから云はんこつちや無い！』

ソッフィ『えゝ私だつて、その位の事は、考へたのよ、だけど、兎に角つまらなかつたな』

と云つてゐる中に、誰か室の戸を叩きました。女中が戸を開けますと、ランベールが入つて來ました。ソッフィとポールは大喜びで迎えました。

『驢馬は？驢馬は？』

と二人で突然尋ねました。

ランベール『此近所には、驢馬は無かつたので、あれから今迄方々の家へ、入つて聞きましたけれ共、一匹も賣物が無いので御座います』

ソッフィは泣き出して、

ソッフイ『まあどうしたらいゝでせう！運の惡い事ねどうしませう！』
ランベール『そんなに落膽なさらないでも、宜しいでは、御座いませんか、きつと探出して參りますけれども、少し待つて戴かなけりやなりません』
ポール『待つッて！どの位待つのゝ』
ランベール『まあ一週間か、ことによつたら、二週間もかゝつたらありませう、兎に角明日、馬市へ行つて見て參りませう、お母様にお目にかゝつて、明日、早く馬市場へ行く事を申しあげませう』
と云つて、ランベールは出て行きました。
子供達は、何日迄待てば、驢馬が手に入るだらうかと云つて、非常に落膽して居りました。
翌朝も、やつぱり待つて居りました、そうすると御母様は、
『何でも思ふやうに出來ないものだよ、自分の欲しいものが、直に得られるといふ事は、仲々むづかしいから、氣長く待つといふ事に慣れなければなりません』
と云つて、御聞かせになりました。子供達も得心がいつて、
『本當にさうで御座いますね』
と云ひ乍ら、ランベールが驢馬を買つて、歸るのを樂しんで待つて居りました。
暫くすると、ポールは遠くから、ヒーハン〳〵と云ふ、驢馬の聲をきゝつけて、
『ソッフイ〳〵驢馬の聲がするでせう！きつとランベールが歸つて來たのよ』
と云ひましたからお母様が、
『あれは他の人が驢馬を曳いて、通るのでせう』
とおつしやいますと、ソッフイは、
『御母様、外迄行つて、見て來てよろしう御座いますか、ことによつたら、ランベールが驢馬を連れて歸つたのかも知れませんから』
と申しあげてゐる内に、又驢馬の鳴聲がいたしましたから、ソッフイが、

『行つてもよう御座いますか？』

とせがみましたから御母様は、

『えゝ〜行つて入らつしやい、けれ共、門から外へ出てはいけませんよ』

とおつしやいました。其言葉も聞き流して、ソッフィとポールは、矢の様に出て行きました。

そして二人は芝生の上や、叢の中をかけぬけて、少しも早く門の所へ行かうとしました。御母様は、それを御覽になつて、

『そんな草の中へ、入つてはいけませんよ！トゲで怪我をするから』

とお止めになりましたけれ共、そんな事には、耳にも入れないで、小さな鹿の様に飛んだり、跳ねたりして間も無く、垣根の所へ參りました。そして、第一に、二人の子供達の目についたのは、ランベールが立派な驢馬を引いて、歸つて來るので御座いました。

『驢馬が來た〜あゝ有りがたう、ランベール！ほんとうに嬉しいなあ』

と二人が一齊に叫びました。

ポール『まあ立派な驢馬だ事！』

ソッフィ『やさしさうな樣子をしてる事ね、早く御母樣に申上げませうよ』

ランベール『ポール樣、乘つて御覽なさい、おとなしいから、そしてお孃樣は、ポール樣の後に、お乘り遊ばせ、私が手綱を引いて歩いてあげますから』

ソッフィ『でも落こつたらどうしやう！』

と云つて迷つて居りますから、ランベールは、

『大丈夫で御座いますよ、私が側へついて歩きますから、そして此驢馬は、大變やさしいですから、安心しておのんなさいまし』

と申して、ランベールが、ポールとソッフィを、驢馬にのせて、御母樣のおいでになる、窓の下迄參りますと、御母樣もお庭へ出ておいでになりまして、お喜びにな

りました。皆で驢馬を厩へ連れて行つて、ソツフイとポールとで、麥をやりました。

その間に、ランベールは藁を持つて來て、寢床をこしらへてやりました。子供達は、驢馬が麥を食べるのを、見て居度いと申しましたけれ共、お食事の時間が參りましたので、驢馬は、馬と一緒に、厩につないでおいて、家へ入りました。

驢馬は、土を運んだり、花をのせたりする、綺麗な新しい車が出來る迄、犬の曳いてゐた小さい車が、驢馬につけられました。ポールは、驢馬に手綱をかけたりつたりする事を、ランベールから習ひました。又驢馬を洗つたり、刷いたり、寢取床をこしらへたり、食物をやつたりする事を、習ひました。そしてソツフイもポールと、同じやうに、手傳つていたしました。御母樣は、驢馬に、子供が乘れる樣に、綺麗な鞍だの、手綱だのを、買つておやりになりました。初めは、此驢馬に乘る時分には、ばあやがついて行きましたけれ共、此驢馬が、羊の樣に、柔順しい事が分つてから、お庭の中を歩く時には、誰もつか無いで宜いことに、御母樣が、御許し

になりました。或日、ソツフイが驢馬に乘つてる時、ポールが棒で一鞭あてゝ、驢馬を馳らせました。

ソツフイ『そんなにお打ちでないよ、痛いだらうから』

ポール『打かなけりや、馳ら無いんだもの、第一棒は細いんだもの、大して痛くはないだらうよ』

ソツフイ『あゝ私はいゝ事を考へた、打つ代りに、拍車で突つついてやりませう』

ポール『おかしな事を云ふね、お前の靴には、拍車は無いぢやないか？それから、驢馬の皮は厚いから、拍車なんぞで突ッついたつて、耐へやしないよ』

ソツフイ『まあいゝや、試めして見ませう、若し拍車が痛く無けりや、尙いゝぢやないか』

ポール『しかし拍車が無いぢやないか？』

ソツフイ『何太い針を、私の靴へ刺して、作らへませう、ピンの頭が、靴の中へ入つ

て、先が外へ出てれば、足が痛くはないから』

ポール『そうね、いゝ考へだ、ピンを持つてるの？』

ソツフイ『いゝえ、今此處には持つてないけれ共、家へ歸つて、そして臺所へ行つて、もらつて來ませうよ』

そこでソツフイは、直ぐ驢馬を走らして臺所へ針を貰ひに行きました。料理人は、ソツフイが着物を破つたのを、つくろうために、針が入用なのだらうと思つて、二本の針をやりました。ソツフイは、人の居る所で、拍車を作つては、善くないと思つた。それは御母様に叱られやしないかと、心配してゐたからでした。

『此處でこしらへない方がいゝでせう、森の中へ行つてこしらへませうよ、そうすれば、驢馬は、その間草をたべており、我々は丁度旅の人が、道に休んでる樣な格好でゐればいゝじやないの』

と云ひ乍ら、森の中へ行きました。ソツフイとポールは、驢馬から下りましたので、

驢馬は、自由になつたので、嬉しがつて、道の端の草をたべ初めました。ソツフイとポールは、草の上に坐つて、拍車を作りに取りかゝりました。先づ一本の針を、靴の踵に通しましたけれ共、曲つてしまひました。二本目の時は、初めの針で、穴があいて居りましたから、わけも無く通りました。それでソツフイは、拍車のついた靴を穿きました。ポールは、驢馬をつれて來て、ソツフイを助けて乘せました。それで、その靴で一打うつと、針が驢馬を刺したので、驢馬がとこ〳〵馳しり初めました。ソツフイは喜んで、幾度も〳〵刺突ますものですから、驢馬は一層早くかけ出しました。あんまり馳けるので、ソツフイは怖くなつて、驢馬の立髪に、しがみついてしまひました。怖いものですから、靴の踵を確つかり締めるので、締ればしめる程針は驢馬の體にさゝりますので、驢馬はたまらず飛び上つたので、そのはづみに、ソツフイは、十歩も先に放り出されました。ソツフイは殆んど氣絶した樣に倒れましたから、後に居たポールは驚いて走つて來て、ソツフイを起しました。す

るとソツフイは手だの、鼻だのに、引掻き傷が出來て居ました。

ソツフイ『何うしませうね、御母様がこの傷は、如何したのだと、御聞きになつたら、何とお返事をしませう？』

ポール『本當の事を云ふのさ』

ソツフイ『いけ無いよ〜〜そんなにすつかりお話してしまふと、叱られるから、針で拍車をこしらへた事は云つちやいけないよ』

ポール『それぢや何といふの？』

ソツフイ『驢馬が跳ねて、私が落こつたつて云へばいゝわ』

ポール『でも此驢馬は、大變柔順しいのではないか、お前が拍車の針でつツつかなければ、跳ねやしないんだもの』

ソツフイ『お前が、御母様に針の事をお話をすると、きつと私は叱られて、驢馬を取りあげられてしまふよ』

ポール『でも、僕は本當の事を云ふ方が、いゝと思ふね、お前が御母様にかくして、嘘言を云つても、御母様は、いつの間にか、御承知になつてゐるから、お前が本當の事を云つて御詫びするよりか、もつとひどく罰しられますよ』

ソツフイ『何故、お前は、何うしても、針の事を話したいの？、何も針の事を云はなくつても、驢馬が跳ねて落こつたのは、本當だから、それだけ云へばいゝちやないか』

ポール『それでは、お前のいゝやうにおし、きつと後悔するから！』

ソツフイ『お前は何とも云つてはいけないよ、決して針の事を、御話しゝてはいけないよ』

ポール『大丈夫だよ、僕だつて、お前が叱られるのは、嬉しか無いんだから』

こんな話をして、云ひ合つておりましたが、おつことした驢馬はいつの間にか、何處へか行つてしまつて、其處へらには居りませんでした。

驢馬は、きつと家へ歸つたのだらうと、ポールが云ひましたので、二人共家の方へ急いで歸りました。そうすると、その道の森の中で、二人の御母様達が、自分達の名を呼び乍ら、御出になるのに會ひました。

母『お前達は、どうしたのです！驢馬が單獨で馳けて、何かに恐れたやうな樣子で、歸つて來ましたから、捕へるのに、大變骨が折れましたよ、それで私共は、お前方に、怪我でもありはしないかと、思つて心配で來たのです』

ソツフイ『いゝえ何でも無いんですよ、只私が落こつたばかりです』

母『落こつたんですつて、如何して？』

ソツフイ『私が乘ッてゐました時、何うしたもんだか、驢馬が急に跳ねたんです、そして私は砂の上に、落されたんです、少し手と鼻とに怪我をしたのですけれ共、何でもないんございます』

母『ポール！どうして驢馬は、跳ねたんです、あの驢馬は大變柔順しいと、思つた

のに……』

ポールは、少し困つた樣子をして、

ポール『ソツフイが、乘つてゐた時、跳ねたんですよ』

ポール母『それは分つてゐる、けれ共、どうして驢馬が跳ね出したかといふのさ』

ソツフイ『それはね伯母樣！、驢馬が跳ねたかつたのでせう！』

ポール母『それはさうね、驢馬だつて、靜かにばかりして居度くは無いでせうからけれ共、兎に角不思議ですね、滅多に跳ねるといふ事は無いのに』

と云つて不思議に思つて居られました。

皆家へ歸ッてから、ソツフイは、砂にまぶれた顏と、手を洗て、破れた着物を代へに、室へ行きました。すると、そこへ御母樣が、入つておいでになりまして、ソツフイの脱いだ着物を御覽になりました。

母『こんなに着物が、汚れたり、裂けたりするには、餘程ひどく落つこつたのでせ

うね』

丁度其時ばあやも來てゐて、

ばあや『あらまあ！』

母『何だい？』

ばあや『まあ御覽遊ばせ、いゝ御考へじやありませんか、こんな事を遊ばして』

と云つて、大きな針を見せました。

母『何だい一體、こんな大きな針が、どうしてソッフイの靴に、さゝつてゐたのでせう？』

ばあや『此針が一人でに、刺さる氣遣は御座いませんよ、靴の皮は、堅いんですもの、一生懸念に誰かゞ刺さなければ、刺さりません』

と申しましたから、御母樣は、ソッフイをお呼びになつて、

母『お前此針が、靴に刺さつてたのは、何ういふ譯です？』

と尋ねられましたから、ソッフイは非常に困つて、

ソッフイ『知りませんよ、一寸も存じませんよ』

母『何ですつて！お前が知ら無いんですつて！お前が靴をはく時、こんな大きな針の刺さつてゐる事を、知らなかつたの？』

ソッフイ『えゝ一寸も氣がつきませんでした』

ばあや『お嬢樣それは嘘でせう！今朝、私がその靴を、御穿かせした時は、針なんか御座いませんでしたよ、御母樣に、私が不注意だつたといふ事を、疑はれますよ』

と申しましたけれ共、ソッフイは何とも申しませんでした。只困つて段々顔が眞赤になりました。

母『若しお前が本當の事を云はなければ、私はポールに聞きますよ、ポールは決して嘘をつかないから』

と云はれましたから、ソッフイは大きな聲で泣き出しました、それでも白狀をしま

せんでした。御母様は、妹のポールの御母様の所へお出になりました。そうするとポールの御母様は、ポールにソッフイの靴の針の事を、聞いておられる所でありました。ポールは伯母様が、大變怒つて入らつしやるので、ソッフイが本當の事を白狀したかと思つて、かう答へました。

ポール『それは拍車の代りにしたんですよ』

ポール母『何のために拍車を、作へたの？』

ポール『驢馬を、走らせるためにです』

ソッフイ母『あゝそれで驢馬が、跳ねて、ソッフイを落した事が分りました、針でつゝつかれたものだから、早く逃がれやうと思つて、跳ねたのでせう』

と云ひ乍ら、ソッフイの御母様は、この事をお聞になつて、急いでソッフイの室へ、歸つておいでになつて、

母『皆分りましたよ、お前は嘘つき娘だね、お前が初めから、本當の事を云つたら、

叱る丈にして、罰しませんけれ共、嘘をついたから、その罪として一ケ月の間、驢馬にのる事を禁じます』

と云ひ捨てゝ、出て行かれました。其時ポールはソッフイの室へ入つて來て、

『そら御覽ソッフイ！お前が本當の事を、云つて詫れば、驢馬は取りあげられなかつたのに……』

と云つてソッフイを諫めました。ソッフイの御母様は、ソッフイが何度も詫まつて、驢馬にのる事を願ひましたけれ共、お許しになりませんで、一ケ月の間とう〳〵乘ることを止められました。

二十　小さな車

ソッフイは御母様が、如何しても、驢馬にお乘せにならないので、或日、ポールにかう申しました。

ソツフイ『私達は、驢馬にのる事が、出來ないから、小さな車を驢馬につけて、代りばんこに、御者をしませう』

ポール『それやいゝけれど、伯母様が、御許しになるだらうかね』

ソツフイ『お前行つて、伺つておいでよ、私からは聞かれないから』

ポールは、伯母様の所へ、走つて行つて、驢馬に車をつけても、宜しうございますかと伺ひました。

ソツフイの御母様は、ばあやが一緒に行けば、好いとおつしやいました。ポールが其返事を、ソツフイに申しましたら、ソツフイは、ぶつ〳〵云つて、

ソツフイ『つまら無いわ、ばあやが一緒では！ばあやは何でも、怖がるのよ、だから車を走らせる事なんかは、きつとさせやしませんよ』

ポール『走らせ無いでもいゝじやないか、伯母様がそんな事をしては、いけないとおつしやつたぢやないの？』

ソツフイは、ポールに返事もしないで、ポールが驢馬に車をつけたり、ばあやを呼びに行つたりする間、ふくれて居りました。三十分許りたつてから、車が驢馬につけられました。ソツフイは、直ぐそれに乘りましたが、始終ふくれて、ポールが何と云つて慰めても、機嫌をなほしませんでした。それで遂々ポールも、

ポール『お前が、そんなに氣むづかしい顔をして居ては、つまらないから、僕はもう家へ歸るよ、本當につまらないや！一人で話して、一人で遊んで、お前のふくれつ面を見るのは、つまらないからね』

と云つて、驢馬を家の方へ、曳いて行きました。それでもソツフイは、まだふくれて居りました。家の前へついてから、降りやうとして、ソツフイは石段を踏みはづして、轉びました。そうすると、ポールは驚いてソツフイを起しました。ソツフイは、何處も怪我はしませんでしたけれども、ポールの親切に深く感じて、泣き出しました。

ポール『ソッフイさん、どこが痛いの？私にすがつて、お歩きなさいよ、確つかりつかまへてあげるから……』

ソッフイ『いゝえ、どつこも痛いんじや無いの、私が泣くのは、こんなに始終親切なお前に怒つたり、ふくれたりしたのを、後悔したから泣くのよ』

ポール『そうそんなら、何にも泣か無いでいゝぢやないか、私が親切にするのは、お前が好きだから、するんですもの、お前が喜んでくれるので、僕も嬉しいのよ』

と申しましたので、ソッフイはポールの優しいのに、一層深く感じて、つよく泣き出しました。

それでポールはどうして、慰めてよいか分らなくなつて、

『そんなに、お前が泣くと、私も悲しくなるよ、僕も一緒に泣き度なる』

と云ひましたから、ソッフイは涙をふいて、

『も少し泣かして下さいよ、その中に私はいゝ人になる様な、心持がするから』

と云つて、又泣きました。然しポールの眼も、涙含んで來たのを見て、やうやくソッフイは、泣き止みました。そして無理に笑ひ顔をつくつて、一緒に室へ行つて、食事の時間迄、機嫌よく遊びました。

翌日ソッフイは、驢馬の車に乘つて、散歩に行かうと云ひ出しました。けれ共、ばあやは丁度、其日は洗濯物がありますから、一緒に行かれませんでした。御母様と伯母様は、お友達の奥様の所へ、行かなければなりませんでしたから、子供だけで出る事は許されませんでした。

『どうしたらいゝでせう』

といつて心配して居ましたから、御母様は、

母『お前達二人で、柔順しく乘つて行くなら、行つてもよろしい、けれ共、ソッフイお前は、いつもいろんな事を、考へ出しては失敗るから、又怪我でもしてはいけないと思つて、それが心配なのですよ』

ソツフイ『大丈夫ですよ、決して失敗るやうな事はいたしませんから、私達許りで、やつて下さいまし、其上、此驢馬は、大變柔順しう御座いますもの』

母『えゝ驢馬は、誰でも惡戯さへしなければ、柔順しいのですけれど、お前が先達の樣に、針でつゝついたりなんかすると、車を引くりかへしますよ』

ポール『伯母樣、大丈夫ですよ、ソツフイは、もう此間の樣な、惡戯はしないでせう、私も靴に、針を刺すお手傳ひをして、お母樣から叱られましたから、また二度とそんな事はいたしません』

ソツフイの母『そんなら二人でお出でなさい、けれ共、庭から外へ出ちやいけませんよ、通りへ出ると危いし、又あんまり早く馳けさせてはいけないよ……』

とおつしやいましたから、子供達は大喜びで、驢馬に車をつけに、厩の方へ急いで行きました。

馬車の用意が出來ました時に、百姓屋の子供二人が、學校から歸つて來ました。

兄のアンドレといふ子供は、

アンドレ『あなた方、馬車へ乘つて行くのですか？』

ポール『あゝ、お前も一緒に來ないか』

アンドレ『でも此弟を、一人殘して行く譯にはゆきませんもの』

ソツフイ『それぢや弟も、連れて來たらいゝだらう』

アンドレ『えゝそれならよろしう御座います、有難う御座います』

ソツフイ『誰が御者臺へのるの？』

ポール『お前がのり度ければ、先へおのり、そこに鞭があるよ』

ソツフイ『いゝえ、私はも少し、驢馬が勞れて、柔順しくなつてから乘りませう』

と申しました。四人の子供は、車に乘りまして、時には靜かに、時には少し馳けさせて、代りばんこに、驢馬を歩かせて、二時間許り乘り廻しました。それで驢馬はだん〳〵と草臥れ初めました。少し位、子供が叩いても知らん顔をして、仲々早く

は歩みませんでした、段々に歩み方がのろくなりました時、丁度ソッフイが御者をして居りました。

アンドレ『お嬢様、もつと早く驢馬を馳らせたければ、此處に枸橘の枝がありますよ、此枝で打てばきつと走ります』

ソッフイ『そう〳〵そりやいゝ考へだ、此懶者を、も少し早く、馳らせやうぢやなありませんか』

と云つて、車を止めましたから、アンドレは車から降りて、可成太い枸橘の枝を折つて來ました。

ポール『氣をおつけよ、ソッフイ！お前の御母様は、驢馬をつッついちやいけないと、おつしやつたぢやないか』

ソッフイ『枸橘のトゲが、此間の針の様に、つッつくと思つてゐの？驢馬の皮は、堅いから、一寸も感じやしないだらう？』

ポール『それじや、何故アンドレに枸橘の枝をとらしたの？』

ソッフイ『それはあの枝は、私の持つてゐる、鞭よりも太いからさ』

と云ひ乍ら、驢馬を叩いたので、驢馬はとことこと馳り出しました。ソッフイは大喜びで、又二三度叩きましたので、驢馬は段々に走り初めました。ソッフイは喜んで居りましたけれ共、ポールは、ちつとも笑ひませんでした。ソッフイは又今に失敗つて、御母様に罰しられたり、叱られたりする事だらうと、ポールは心配して居りました。阪の所へ參つて、ソッフイが又打つたので、驢馬は今度は少し怒つてかけ出しました。ソッフイが大急ぎで止め様としましたけれ共、驢馬はます〳〵怒つて、一生懸命に走り出しました。子供達は一度きに、大きな聲を、出したものですから、驢馬はそれに驚いて、尙ひど〳〵走り出したものですから、道側の土の盛つてある所に、打つかつて、子達は引くり返つて、放り出されました。驢馬は引くり返つた、車を引づり乍ら、とう〳〵車の毀れる迄、馳り續けました。幸に車が、低かつた

ものですから、子供達は、怪俄はしませんでしたけれ共、顔や手に引掻き傷をこしらへました。

皆悲し相な顔をして、起き返つて、百姓屋の子は、自分の家へ歸りました。ソッフイもポールも、家へ歸りましたが、心配して、二人共話もしませんでした、暫く經つてから、ソッフイはポールに、

ソッフイ『私は御母様に叱られるだらうね、何とお母様はおつしやるだらう』

ポール『私はお前が、枸橘の枝をとつた時に、きつとあれで打つたら、驢馬が馳出すだらうと思つたから、もつとお前を止めればよかつた、お前も、そうすれば、私の云ふ事を聞いて止めたらうに……』

ソッフイ『いゝえとても、私はお前の云ふ事なんか聞かなかつたよ、驢馬の毛が厚く生えてゐるから、枸橘の刺なんか、たつまいと思つたんだもの、御母様が何とおつしやるだらう！』

ポール『何故お前は、私の云ふ事を聞かなかつたんだい？、もしお前が、いつでも、御母様のおつしやる事を聞いてゐたら、こんなに度々叱られる事もないものを……』

ソッフイ『是からは、きつと直しますよ、けれども、人の云ふことを聞くのは、隨分いやなものですね』

ポール『でも叱られるのは、尙嫌やだらう、其上人が私達に爲てはならぬと云つた事は、きつと危い事だからね、それを聞かないと、必ず不幸な事が起るから……』

ソッフイ『本當にそうね、まあ如何しませう、御母様が歸つて入らつしやつてよ、車の音がするでせう！、早く駈けて行きませうよ、御母様達が御歸へりにならない前に……』

と云つて、ソッフイとポールが馳け出しました。けれ共、馬車の方が早いものですから、子供達が家へついた時には、もう馬車がついて、御母様達が玄關で待つて居られました。そして子供達の顔に、引掻き傷のあるのに直ぐ御氣がつきました。

『おや又怪俄をしたのかい、どうしたのです？』
とソッフイの御母様が、おとがめになりました。
ソッフイ『あの驢馬がね』
と云ひかけますと御母様は、
『えゝきつと、こんな事が起るだらうと思つたので、お客に行つてる間も、始終心配してゐたのですよ、驢馬が又怒つたのですか？お前達は驢馬がどんな事をしたので、こんな傷をしたのです？』
ソッフイ『驢馬が、私達を引くりかへして、暫く引摺つて行つたものですから……』
そして車は少し毀れたと思ひます』
ポールの母『おまへ達が、又驢馬が怒るやうな、いたづらをしたのでせう？』
とおしやいましたから、ソッフイは、默つて下を向いて居りました。ポールも眞赤になつて、何にも云ひませんでした、するとソッフイの御母様は、

『お前達の樣子で、又何か惡戲をしたことが分りました、どんな事をしたか云つて御覽なさい』
ときびしくお尋ねになりました。
ソッフイは暫く困つて居りましたけれども、本當の事を白狀しやうかと決心して、すつかり出來事をお話しました、すると御母様は、
『此驢馬が來てから、始終お前達に、不幸な事が出來ますね。ソッフイはいつでも、いろんな考へを出すから、此驢馬を、賣つてしまひませう』
とおつしやいますと、ソッフイとポールは一緒になつて、
『あゝ御母様伯母様、私達は、もう決して惡戲はしませんから、驢馬を賣る事だけは止めて下さい』
と御願ひしました。するとソッフイの御母様はポールに向つて、
ソッフイの母『お前は再びしないだらうけれ共、ソッフイは、又必と他の事を考へるで

せう、此次は、もつと危い事を考へるかもしれないがらね。』

ソツフイ『いゝえ大丈夫ですよ、此度こそ御母様が、御許しになつた事丈しかいたしません、御母様に堅く御約束いたします』

母『それでは、四五日待ちませう、けれ共、此度一寸でも悪戯をしたら、直賣りますよ』

と申されましたので、子供達は喜んで御禮を申しました。

御母様は、驢馬が何處に居るかと、御聞きになりましたから、子供達は、驢馬が車を引いたまゝ、何處かへ走つて行つた事を思ひ出し、御母様にお話しました。すると御母様は、ランベールをお呼びになつて、探しにおやりになりました、ランベールは一時間ばかりたつて、歸つて參りまして、

ラレベール『あなた方の驢馬のために、大變な不幸が出來ました』

子供『何だえ、どんな不幸だえ』

とポールとソツフイが驚いて、一緒に聞きました。

ランベール『驢馬が驚いてどん〳〵と走つて參りますと、木戸が開いてゐたものですから、丁度その時、往來を通つてゐた、乘合馬車に打つかつて、其馬車の馭者が、馬を止める間も無く、驢馬と車と引くりかへしました。そして、も少しで乘合馬車も、ひつくりかへる所でしたけれども、皆が吃驚して車を止めて、驢馬を起しました時は、もう驢馬は石の樣に堅くなつて死んで居りました。』

此事を聞いて、子供達を初め御母様達も、吃驚して大きな聲を出したものですから、他の人達迄も何事が起つたかと、驚いて出て來ました。ランベールは初めから、委しく驢馬の死んだ事を話しましたので、ソツフイとポールが、非常に悲しみました。それで、御母様はあんまり、可哀相にお思ひになつて、二人を御自分のお室へ、お連れになつて、いろ〳〵とお慰めになりました、けれ共、ソツフイは驢馬を死なしたのは、私のせいだと云つて歎きました。ポールはソツフイにそんな事をさせた

のは、私の罪だと云つて、後悔しました。そして其日は二人共終日、悲しんで暮しました。其後ソツフイは、死んだ驢馬と似て居る驢馬を、見る度に悲しく思ひました。そして御母様もこれにお懲りになつて、再び驢馬を、ソツフイに買つて下さいませんでした。ソツフイも亦驢馬を欲しがりませんでした。

二十一　龜の子

ソツフイは動物が好きで御座いました。彼は是れまで雛鳥だの、栗鼠だの、猫だの、驢馬だのを、飼ひましたけれ共、まだ犬は飼ひませんでした。それは何故と申しますのに、犬は時々狂犬病にかゝりますから、御母様が、危いとおつしやつて、御飼はせにならないので御座いました。

或日ソツフイは、御母様に、

『今度は、何を飼つて下さいますか、何か柔和しい害をしないので、逃げ出さな

くて、飼ふのに面倒でないものが、好うございますね』

と申しました。御母様は笑ひ乍ら、

母『そんな、お前の云ふ様な、注文のものは、龜の子位のものだね』

ソツフィ『そう〳〵龜の子がよございますね、龜の子は、可愛らしくて、そして滅多に逃げ出しはしませんから……』

母『もし逃げ出そうとしても、お前に直ぐ捕へられるだらうからね』

ソツフィ『えい〳〵捕えますとも、どうか龜の子を買つて下さいね、御母様！』

母『まあお前は、余程變つてゐるよ、それは私が冗談に云つてるんだよ、龜の子なんて、あんな面白くも無い、體は重くるしくて、醜い顔をして居るあんなものは、決してお前だつて好きではありますまい』

ソツフィ『そんな事、おつしやらずに買つて頂戴よ、私龜の子は大好です、きつと可愛がつて、柔順しく龜の子と遊びますよ』

母『そんなにお前が欲しければ、買つて上げ無いでもないが、二ッの條件がありますよ、第一は食物をやる事を忘れて、飢死をさせない事と、第二はお前が何か悪戯をしたら、すぐ取り上げる事の約束が出來るなら買つて上げやう』

ソッフィ『えい〳〵きつと御約束を聞きます、いつ龜の子は、買つて下さるの？』

母『明後日は買つて上げられやう、今朝バリーの御父様の所へ、お手紙を書きますから、一ッ買つて下さるやうに、頼んであげませう、そうすれば、明日の晩位には、送つて下さるでせうから、明後日の朝あたりは屆くでせう』

ソッフィ『まあ有りがたう御座います、ポールも丁度明日遊びに來て、今度は二週間位は泊りませうから、一緒に龜の子で、遊ばれますね』

と云つて非常に喜びました。

翌日ポールが來ましたので、ソッフィは早速、龜の子を、買つてもらふ事を話しますと、ポールはあんないやな物を、飼つてどうするのと云つて、ソッフィの物好き

を笑ひました、そうするとソッフィは、

『枯草で、龜の子の寢床を作つて遣つたり、芝の上に連れて行つて、日向ぼつこをさせたり、サラドのお菜をやつたりして、きつと面白いよ』

と申しまして、云ひ譯をしました。するとポールは、

『あんないやなもの！』

と、けなしましたから、ソッフィは、少しむつとして、

ソッフィ『私は可愛い〻と思ふわ』

ポール『そうね愛嬌があつて、笑顔が美しいでせう！』

と、からかつて云ひますから、ソッフィは怒つて、

『こう御座んすよ、お前は何でも人を馬鹿にしてゐる』

と云ひ返しました。ポールはなほ面白がつて、

『そして歩きつきがいゝね、輕々と身を動かして』

と云ひましたから、ソッフィは益々怒つて、
ソッフィ『もういゝ事よ、默つて入らつしやい、あなたのお氣に入らなければ、どつかへ、龜の子はやつてしまひませう』
ポール『あゝやつておしまひ、僕はあんなもの一寸も惜しくは無いや』
と平氣で云ひましたから、ソッフィはポールに、飛びついて、頭を打つてやりたかつた。けれ共、御母樣との御約束を思ひ出して、只怖い顏をして、ポールをにらんで居りました。
龜の子が、巴里から屆きますと、ソッフィは直ぐ、それをお庭の芝の上へ、持つて行かふといたしましたが、重くツて、地平へ落しました。ポールは、さつきソッフィを、からかつた事を、後悔して急いで手傳に行きまして、龜の子を半布に包んで、二人で持つて行かふと云ひました。ソッフィは龜の子を落して、少し怖くなつてゐる所でしたから、柔順しくポールの云ふまゝにして、持つて行きました。

龜の子は、新らしい草の上に置かれて、喜んで手足をそろ〳〵出し、それから首をもちあげて、方々驚いた樣子で見て居りました。
ソッフィ『ねえ御覽！私の龜の子は、そんなにいやな物でもないし、つまら無いものでもないでせう？』
ポール『そうね、面白くない事は、ないけれ共、あんまりいゝ顏もして居ないね』
ソッフィ『そう云へば、あんまり心持のいゝ顏はして居ないわね』
ポール『そして怖ろしい、いやな足を出してね』
と云ひ加へました。子供達は十日間ほど、何の出來事も無く、龜の子を飼つて居りました。龜の子は、室の隅に草を敷て、其上に寢かして、サラドをもらつて、たべて、幸福に暮して居りました。
或日、ソッフィが、又新らしい考へを出しました。それは、暑い日でしたから、龜の子も、きつと暑ツて、水に入り度いだらうと思つて、

『龜の子を沼の中へ入れて、やつたらさぞ喜ぶだらうね』
と云つて、ポールに聲をかけました。そして龜の子に、水風呂をつかはせ樣と申しました。
ポール『龜の子に行水をさせるつて、何處へ？』
ソツフイ『畑の水溜りの中へさ、あそこの水は、冷くつて綺麗ではありませんか』
ポール『大丈夫かね、龜の子に、障るやうな事はないだらうかね』
ソツフイ『大丈夫よ、龜の子は、水に入る事が大好きですから、きつと喜んでよ』
ポール『どうして、お前は龜の子が、水に入るのを、喜ぶつてことを知つてゐるの？
僕は龜の子は、水が嫌ひだと思ふよ。』
ソツフイ『私はきつと龜の子は、水は好きだと思つてよ、だつて蝦だつて、水が好きでせう、蠣だつてそうよ、みんな龜の子に似て居るでせう』
ポール『そうね、ぢや試めして見やう』

と云つて、草の上に、いゝ氣持に、日和ぼつこをして居る、龜の子をつかまへて、畠の水溜りに持つて行つて、龜の子を手の上にのつけて、水に入れました。
龜の子は、水が體につかつたのに驚いて、急に首と手足を出して、もがき初めました。するとぬるぬるした、いやな氣持の物が、手に障りましたので、ポールもソツフイも、急に手を放しましたから、龜の子は、水の底へ、落ちてしまひました。
子供達は驚いて、植木屋の家へ走つて行つて、早く龜の子をあげておくれと、賴みました。植木屋はこの種類の龜の子は、水の中へ入れると、死んでしまふと、云ふ事を知つてゐたので、大急ぎで畠へまゐりまして、水溜りはさほど深くありませんでしたから、穿いはゐた木の靴をぬぎ、ズボンの下をまくり上げて、水溜りの中へ入りました。そして水の底に、バクバクして居た龜の子を、大急ぎですくひ上げだしました。そして燃火の側へ、暖めに持つて行きました。可哀相に龜の子は、首や足を縮こめて、寒がつて居りました。

段々體が、暖まつて來た樣ですから、子供達は龜の子を、芝の上へ連れて行つて、太陽に暖めてやらうといたしましたので、植木屋は、

『まあお待ち遊ばせ、私が持つて參りませう、まだ何にも食べますまいよ』

と申しますからソツフイは、

ソツフイ『水を浴たのは善くなかつたんだらうね？』

植木屋『無論で御座います、此種類の龜の子は、水は禁物です』

ポール『ちや病氣になるだらうかね？』

植木屋『さあ病氣になるか、ならないか知りませんが、死ぬかもしれませんね』

と云ひましたのでソツフイは、

ソツフイ『まあどうしやう』

と云つて心配しますから、ポールは小さな聲で、

ポール『あんな事、植木やが云つたつて、分りやしないよ、大方龜の子も、猫と同じ

やうに、思つてゐるんだらう』

と云つて慰めました。

三人共、龜の子を連れて、芝生の上へ來ました。植木屋は、そつと龜の子を置いて、又畠の方へ行つてしまひました。二人の子供達は默つて見て居ましたが、龜の子は、石の樣に一寸も動かないで、首も足も引込めたまゝ、一寸も出しませんでした。ソツフイは、この樣子を見て、心配し初めましたので、ポールは、

『も少しうつちやつて置きませうよ、明日になつたら草を食べるやうになつて、そろ〳〵歩き出すやうになるだらうから』

と云つて、慰めてやりました。夕方になりましたので、二人の子供達は、いつもの樣に、龜の子を室へ、持つて歸つて、枯草の床の上へ置いて、サラドをやりました。

翌日二人は早く起きて、龜の子を見舞ひましたが、龜の子にやつたサラドはそのまゝになつて、少しも食べて居りませんでしたから、ソツフイが心配して、

ソッフィ『どうしたんでせうね、いつも夕方やつたサラドは、きつと其晩食べてしまふのに』

ポール『草の上へ、連れて行つて見ませうよ、きつとサラドには飽きたのだらう』

と云つて、ポールは心配し乍らも、少しも動かぬ龜の子の樣子を、ソッフィに見せないやうに、氣をつけながら、

ポール『さうしませうよ、太陽に暖まつたら、元氣が出るでせうから』

ソッフィ『龜の子は病氣になつたんでせうかね？』

ポール『多分そうだらうよ』

と申して、ポールは龜の子が死んで居るといふ事を、ソッフィに云ひ切れないで、二日程、毎日龜の子を、芝生の上へ持つて行つて、暖めましたけれ共、龜の子は少しも動きませんでした。そして、やつたサラドは、少しも減つて居りませんでした。三日目には、龜の子が、いやな臭がするやうになつたので、ポールが隠しきれないで、ソッフィに斯う申しました。

『龜の子は、きつと死んだんだよ、臭くなつたから』

と申しましたので、二人はがつかりして、どうして宜いか分らず、龜の子の死體を見て、ぼんやり立つて居りました。ソッフィのお母樣がお出でになつて、

『お前達二人共、龜の子の側に立像の樣に身動きもしないで、何をして居るの？

そして、この龜の子も、大層柔和しくぢつとして居るのね』

と云つて、龜の子を捕らうとなさいますと、其臭氣に驚かれまして、

『おや此龜の子は、死んでますね、もう臭くなつてるよ！』

とおつしやいました。するとポールは、

『えゝ大方死んだのでしやう』

と申しますと御母樣が、

『どうして死んだのだえ？サラドも側においてあるから、飢え死では無いでせう、

不思議だね、どうして死んだのだらう？』

とお聞きになりましたので、ソッフイは、

ソッフイ『水に入れたのが、惡かつたのでせう』

母『水を浴させたのですつて？誰がそんな考へを出したのです』

ソッフイ『私で御座います、龜の子は、冷い水に入るのが、好きだらうと思つて、畠の水溜りの中へ、つけましたら、手から滑つて、底の方へ落ちてしまひましたの、私達には、取れなかつたもんですから、植木やを呼びに行つて、取つてもらつたのです、隨分長く水に入つて居たんでございます』

母『あゝ又お前の考へから出た失錯かえ？もう今迄に、隨分心配して居るやうだから、それでお前の罪は、あがなはれてゐますから、別に罰しはしませんが、以後決して動物は、買つて上げ無いよ、二人共、今迄幾度も殺したり、死なしたりしましたからね、此龜の子は、捨てゝおしまひなさい』

と云ひ乍ら、植木屋をお呼びになつて、

『是を何處かの穴の中へ、埋めておしまひ』

と御言付けになりました。

龜の子のお話しは之で終りました。其後ソッフイが、豚の子を飼ひ度いと申しましたけれ共、御母様は御許しになりませんでした。それで、ソッフイが動物を、飼ひましたのは、この龜の子が最後で御座いました。

其後はポールが時々、四五日泊りがけに、遊びに參りましただけで、二人で遊ぶより他に御母様から許されませんでした。

二十二　旅立ち

或日、ソッフイとポールが、斯ういふ話をいたしました。

ソッフイ『ポール！何故お前の御母様と、私の御母様と小さな聲で、此頃お話をなさ

るのでせう、お前知つて居ないかい？』

ポール『何故だか、僕はちつとも知らないよ、然し此間、私の御母様が、伯母様に、「親類や、友達や、生れた國を捨てゝ行くのは、つらい事ですね」とおつしやると、伯母様が「殊にアメリカの様な國に行くのはね！」とお答へになつたのを聞きましたよ』

ソツフィ『それは一體どういふ事なんだらう？』

ポール『僕の考へでは、伯母様はアメリカへ行かうとして、お出でになると思ふね』

ソツフィ『それでは、一寸もいやな事ぢや、ないぢやないの、アメリカの龜の子が見られて、嬉しいぢやないの』

ポール『あゝさうとも、アメリカには綺麗な、いろんな鳥が居てよ、鳥でも、眞黑なので無く、赤だの、黄色だの、青だの、紫だの、桃色だの、鳥だつてね』

ソツフィ『えゝ〜〜、鸚鵡だの、小さな鳥だのも、澤山居ると、御母様がおつしやい

旅立ち

ましたよ』

ポール『それから人間でも、黒ん坊だの、赤ん坊だの、黄色ん坊だの……』

ソツフイ『でも土人は怖いわね、私達を食べるつて云ひますもの』

ポール『だつて、僕達は土人の居る方へ、行きやしないやね、都へ土人達が出て來た時、見物するのさ』

ソツフイ『然し何故、私達はアメリカへ行くの？　爰で暮して居ていゝぢやないの？』

ポール『無論そうさ、僕の家は、お前の家のすぐ側だから、毎日遊べるから、いゝけれ共、アメリカへ行つたつて、家がそばで、爰の樣に遊べるなら、僕はアメリカも好きだな』

と話して居る中に、ソツフイは御母樣方の姿を身つけて、

ソツフイ『あゝ御母樣が、伯母樣と一緒にお出でになつた、泣いてお出でになるわ、私もお母樣達が、泣いてお出でになるのを見ると、悲しくなるのよ、あら、あそこ

の腰掛へおかけになつた、行つて慰めて上げやうぢやないの？』

ポール『何と云つて慰てあげやうね』

ソツフイ『私にも分ら無いわ、けれ共、兎に角行つて見ませうよ』

と云ひ乍ら、二人は御母様方の側へ、走つて參りまして、

『御母様！何故お泣きになるの？』

とソツフイが、御母様の顔をのぞいて申しました。

母『お前達には、分らない事だけれ共、少し心配事があるのよ』

ソツフイ『分つてますとも、アメリカへ入らつしやらなければ、ならないからでせう、私が、行くのをいやだと思つて、おいでになるからでせう、私はちつとも嫌ぢやありませんわ、ポールもポールの御母様も、一緒に御出になるのでせう、だからちつとも、いやな事はありません、其上、私はアメリカが大好きですよ、綺麗な國ですもの』

ソツフイの御母様は、娘の云ふ事に驚いて、ポールの御母様と一寸顔を見合せて、ソツフイが行つた事も無い、アメリカをさも〳〵知つた顔に申しましたのが、おかしくソて、お二人ともお笑ひになりました。

母『誰がアメリカへ行くと云つたの？そして其事で、私達が悲しんで居ると思ふのかえ？』

とお問ひになりましたから、ポールは側から、

ポール『私が此間、御母様達が泣き乍ら、アメリカへ行かなければならないと、御話してゐらつしやるのを、聞きましたから、それをソツフイに話しました。ソツフイの云ふ事は尤もです、私達はアメリカへ行つても、一緒に住んで居る事が出來れば、爰と同じに、幸福では御座いませんか？』

と申しましたから、ポールの御母様も、

『あゝそうだとも、お前の察しの通り、私達はアメリカへ行かなければならない

のだよ』

とおつしやいました。

『何故アメリカへ、行くのので御座いますの？』

とポールが尋ねました。

母『それはね、アメリカに居た、私達のお友達のフイシニーといふ方が、死んだのです、其方は親類が一人も無いので、ソッフイの御父様とお前の御父様に、其財産を譲られたので、お二人共其財産相續の爲に、アメリカへ引越さねばならなくなつたのです、私達は、御父様お一人で、アメリカへお出になる事は心配だし、そうかと云つて、親類や、お友達を殘して、行くのはいやなので、それで悲しんで居るのです』

ソッフイ『でも一生、行きつきりでは無いのでせう？』

ソッフイの母『一生ではないが、一年か二年の間』

ソッフイ『その位の事なら、なんにもお泣きになる事は、ないではありませんか、伯母様も、ポールも、私達と一緒に行くんぢやありませんか、御父様達も、どんなに、私達と一緒に、お出でになる事は、御嬉しいでせう』

と申しましたから、御母様達は、此子供達を抱いてキッスをなさいました。

『本當に、此子達の云ふ事は、尤ですね、皆一緒に行くんですものね、それに二年位は直經つてしまひませう』

とソッフイの御母様が、ポールの御母様におつしやいました。其日から、御母様達は、お泣きになりませんでした。ソッフイが或日ポールに、

ソッフイ『ねえ、ポール私達は、お母様方をよく慰めてあげたわね、私達の慰めてあげたのが、一番好かつたのね』

ポール『それはそうさ、御母様方は、私達が一番可愛いんだものね』

それから、二三日たつて、子供達は、御母様と一緒に、お友達の所へ、お暇乞に

まゐりました。お友達のカミールや、マドレーンは、ソッフィとポールが、アメリカに立つといふ事を、きいて驚いて、

カミール『何の位あつちに居るの？』

ソッフィ『二年位でせう、遠いんだもの』

ポール『私達が歸る時は、ソッフィは十になつて、私は八つになつてるね』

マドレーン『私は八つになつてよ、カミールは九つよ』

ソッフィ『まあ九つ！お婆さんになるのね』

とカミールに申しました。

カミール『アメリカから、よいお土產を澤山かつて來て頂戴ね、珍らしいものが澤山あるでせうから……』

ソッフィ『龜の子を、持つて來てあげませうか？』

マドレーン『おゝいやだ！あんなつまらない、いやらしいものはいやよ』

と申しましたので、ポールが側で、おかしくなつて笑ひますと、カミールが、

『なぜポールは笑ふの？』

ときゝましたから、

ポール『ソッフィがね、龜の子一匹持つて居たので、丁度マドレーンと同じ事を、私が云つたら、非常に怒つたの、それを考へ出して笑つたのさ』

カミール『その龜の子は、どうなつて？』

ポール『畠の水溜で、水を浴びせたら、死んでしまつたのよ』

カミール『可哀相にね、私も其龜の子を見たかつたわ』

ソッフィは龜の子の話を、聞き度くないものですから、野原へ行つて花を摘まうといひ出しました。カミールは森の中で、苺を取らうと申しました。それには皆大贊成、で森の中へ參りました。澤山苺がありましたから、大喜びで取つては食べ取つては食べして、二時間も、森の中で遊んで、めい〳〵家へ歸りました。

ソッフイとポールは、アメリカから珍らしい鳥だの、果實だの、花だのをお土產に持つて歸つて、來やうと約束しました。殊にソッフイはもし賣つて居たら、土人の子供も買つてかへらうと申しきした。

翌日も、お暇乞に、方々歩きました、二人の子供の御父樣達は、先へ巴里へ行つて、みんなの來るのを待つて、おいでになりました。

扨いよ〳〵出發となりますと、さすがに住み慣れた、家を出るのですから、ソッフイもポールも、悲しみまして、召使の男も女も、皆別れを惜しんで泣きました。村の人々も、もう再び、此村へは歸つて御出でになるまいと思つて、みんな悲しんで、名殘を惜みました。御主人達は、四頭立の馬車にのつて、女中達は三頭引の車にのつて、二臺の馬車の御者臺に一人づゝ下男がのつて、お供をして參りました。

途中で晝食をして、晩の御飯の時は、もうパリーへ着きました。

旅行の用意に、種々な品を買ひ調へる爲に、一週間ばかり、パリーに滯在しました。

たから、其間に、子供達は、公園に散歩に連れて行つてもらつたり、植物園や、チユイルリーの公園へ行つたり、帽子や靴や、手袋や、玩具や、繪本や、途中で食べるお菓子などを、買ひに行つたりして、樂しみました。

ソッフイは、店に賣つてる動物といふ動物を、皆欲しがりまして、終には、動物園の麒麟の子が、買つて欲しい等と申しました。ポールは見る本毎に欲しがりました。御母樣達は、二人に各々の玩具や、お菓子や、繪本など、途中で入用の品を入れる、小さな鞄を買つておやりになりました。

とう〳〵船の出る、アーブルの港へまゐりましたが、船は三日目でなければ出ないので、其間、町を見物しました。海岸の露店に、アメリカから來た、猿だの、鸚鵡だの、其他樣々の物を見物して、二人の子供は、非常に喜びました。

もしソッフイの御母樣が、ソッフイの云ふ事を、一々御聞きになつたら、少くも一ダースの猿や、鸚鵡や、小鳥や、龜の子など、買はねばならなかつたでせう。け

れども御母様は、ソッフイのねだりを、お聞き入れになりませんでした。

斯うして、三日は直經つてしまひまして、いよ〳〵出發といふので、御母様は、なつかしい、美しい、フランスを後にして行くのを悲しんで、お泣きになりました。御父様方は、出來得るだけ、早く國へ連れて歸る様にしやうと云つて、お慰めになつて、とう〳〵皆を連れて、御出發になりました。

子供達は、珍らし相に、船の中を、あつちこつち、見廻して、いつお國へ歸れるか知れない、永い旅の悲みも忘れてしまひ、又雨風にいつ出遇ふかも分らない、船の危險も知らないで、頻りと喜んで居りました。

ポールもソッフイも、各々の御兩親達と、船室へ入りました。其船室は荷物等入れても、可成廣い部屋で御座いました。食事の時は、みんな船長のテーブルで、御飯を食べました。

船長は、ソッフイと同年位のマルグリットと申す娘が、國に殘してありましたか

ら、其娘の事を考へて、ソッフイをよく可愛がつてくれました。

船長はたび〳〵、ポールとソッフイを連れて、船の中を歩きながら、器械の説明やどうして船が海の上を、走る事が出來るか、又どうして帆をかけるのか、其他いろ〳〵の事を、お話して遊ばせてくれました。

ポール『私は大きくなつたら、海軍士官になつて、船長と一緒に航海しませう』

ソッフイ『いけないわ、海軍士官等になつては、お前はいつ迄も、私と一緒に居るんじやないの？』

ポール『お前も一緒に來たらいゝだらう！』

ソッフイ『お母様と別れるのは嫌ですよ、私はいつまでも、御母様と一緒に居るのだから、お前も私と一緒に居なくつちやいけないわ』

ポール『ハイ〳〵分つたよ〳〵、それではいつまでも、お前達と一緒にゐませうよ』

と申してソッフイを慰めました。

航海は隨分長く續きました。此人達がどうなつたか、其後の事は、プチトフイーユモデルと申す本を、お讀みになるとソツフイの事が分りますし、レ・バカンスといふ本に、ポールの事が書いて御座います。（終）

大正十年十一月廿五日印刷
大正十年十二月一日發行

譯述者　本野久子

發行者　東京市京橋區元數寄屋町三丁目七番地　福田良太郎

印刷者　東京市芝區愛宕町三丁目二番地　中野鉄太郎

發行所　東京市京橋區元數寄屋町三丁目七番地　株式會社北隆館

東洋印刷株式會社印刷

不許複製

定價金壹圓八拾錢

506
142

終